

# 中東情勢分析



## アラビア語起源の星の固有名

### イスラーム天文学の功績 (2)

流通経済大学

講師 上野 悌嗣

今回は年初から年末までの代表的な星座を構成する星の固有名と、それにまつわるアラビア人の星座観について考えてみます。

かつて人は星とともにあった

地球が光害や大気汚染とは無縁であった古代、地球上のすべての人々は星を友とし、星とともにありました。彼らは星の位置によって時季を知り、農耕や漁撈に従事しました。どの星がどの位置に現れたら雨季が近いとか 種蒔き時季が来たとか、特定の魚が回遊して来るとか産卵にやって来るとか、星は時季を知るのに大切な役割を果たしました。また、羅針盤、レーダー、航行衛星などのなかった時代ですから、星は交易に携わる船乗りや隊商の商人が方角を知るのに生命にかかわる重要な指針となりました。星は人間の生活に密着した不可欠の存在であったのです。

人々は夜空に明るく目立つ星の見かけ上の集ま

りがつくる形状から、実生活や民間伝承にかかわりのあるさまざまな動物、人物、物体を連想しました。これが星座の始まりで、「星座」を意味する *constellazione* (伊) / *constelación* (西) / *constelação* (葡) / *constellation* (仏・英)などは、ラテン語の *con*(一緒に)と *stella*(星)との合成語に由来し、「星の集合」を意味します。星の並び方をどのようにグループ化して眺めるかは、当然それぞれの地域や民族によって互いに相違します。アラビア人の星座のとらえ方もギリシア人のそれと違う点が多く、それが現在も使われている星の固有名に表れています。

イスラーム文化が西欧世界に与えた影響や歴史的意義を説明するのに、欧州諸言語に定着したアラビア語の語彙を引き合いに出すことがよく行われますが、アラビア語で命名された星の固有名も無視してはならないと思います。前回にも述べたように、ギリシア語やラテン語の星名が100個ほどしかないのに対し、アラビア語起源の固有名が300個近くもあることは、イスラーム天文学者が星の研究にいかにか心血を注いだかの証左であり、それが1000年を経た今も広く天文学において使用されていることを考えると、彼らが私たちに伝えた遺産は高く評価されるべきでしょう。

「星はすばる」：清少納言（おうし座）

枕草子に「星はすばる 彦星 明星 夕庚 …」とあるように、清少納言が第一に愛でた星はすばる（昴, Pleiades 星団 図1）です。涙にうるんだように青白く光る6個の星の群れはおうし座の中にある星団で、年末年始の夜8時ごろ頭のま上に昇って来ます。双眼鏡で見るとその美しさは息を呑むほどです。

すばるの名は「集まってひとつになる」を意味する「結ばる、統ばる、統まる」を語源とし、上代人が首飾りとした「すまるの珠」になぞらえたものといわれます。枕草子が書かれたのが西暦1000年前後ですから、すばるという名称は1000

年前にはすでに使われていたこととなります。すばるは6個の星が連なって見えるので、「むつら星」とも呼ばれますが、古代人が自分たちの玉飾りになぞらえた「すばる」の呼称は、この星団の静謐な美しさをうまく表現しています。

ギリシア神話では、宇宙をかつぐ巨人アトラスの七人の娘が狩人オリオンに追い回されたので、大神ゼウスが娘たちを空に上げて星にしたのですが、そのうちの一人が彗星となって姿を消して残った六人の娘を悲しませたので、すばるは涙にうるむように見えるのだといえます。

アラビア人はすばるを الثريا *al Thurayyā* と呼んできました。この呼び名は女性の名前として人気があり、*Thurayyā*、*Soraya*、*Süreyya* として中東世界で広く使われます。الثريا *al Thurayyā* は ثروة *tharwa* / ثراء *tharā'* / ثرون *tharwān* (豊富に存在するもの)の指小形で、この星団が夜明けに東の空に昇って来る頃になると雨の季節がやって来て「大地に豊穡をもたらす」ことに由来するといわれます。

雄牛の赤い目 アルデバラン (おうし座)

すばるの少し南東に赤く輝く星アルデバラン *Aldebaran* があります (図1)。一見ラテン語風の名前ですが、アラビア語の النير ال دبر *al Nayyir al Dabarān* (後に続いて光るもの)の後半が語源です。دبر *dubr* (背後、おしり)に由来するこの名は、この星が常にすばるの後ろに続いて空を横切っていくことによるものです。日本でも古くから「すばるのあと星」と呼んでいるのは、アラビア人と同じ見方です。アラビア人はアルデバランを سائق الثريا *Sā'i'iq al Thurayyā* (すばるの御者)とも呼びましたが、これは馬車の御者が馬の背後から手綱をさばくように、アルデバランがすばるを背後から押すように走らせていると見たからです。

アルデバランはまた، عين الثور *'Ayn al Thawr* (雄牛の目)とも呼ばれ、この星が雄牛の目にあ

たることを的確に表現しています。図に示すごとくアルデバランはおうし座の主星 ( $\alpha$ 星)で、V字形にならんで雄牛の顔を形づくる「ヒアデス星団」という星の集団の一員です。赤味を帯びているので、雄牛の血走った右目に見立てられます。雄牛は長い二本の角を振りかざして、すぐ後ろを昇って来るオリオンに襲いかかる姿勢をとっています。

メドゥーサの首は悪鬼「アルゲール」の頭  
(ペルセウス座)

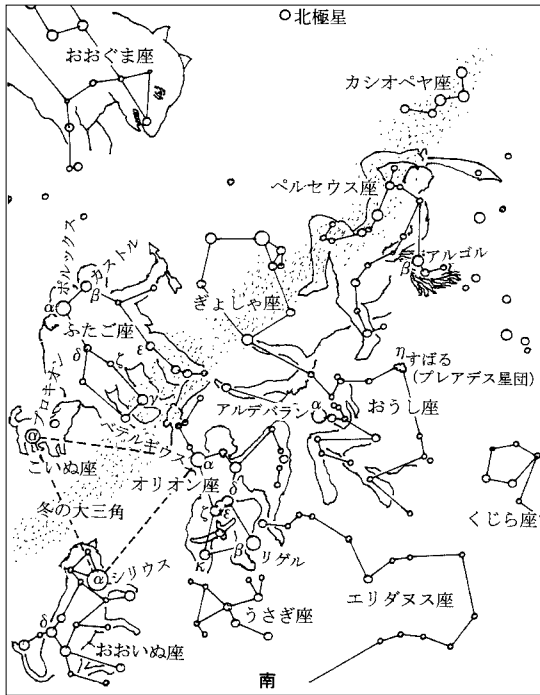
すばると、W字形で知られるカシオペア座との間にペルセウス座という星座があります (図1)。この星座は化け鯨からアンドロメダ姫を救出した勇士ペルセウスになぞらえた星座で、その $\beta$ 星アルゴル *Algol* はペルセウスが左手に掴んだメドゥーサの首にあたります。 $\beta$ 星が蛇の髪をもつ悪魔の女メドゥーサの首になぞらえられたのは、この星が光度を変える不気味な星だからで、アラビア人もこれを不吉で不幸をもたらす星と考え、رأس الغول *Ra's al Ghūl* (墓をあばいて死肉を食い荒らす悪鬼「アルゲールの頭」と名付けました。アルゴルが光度を変えるのは、明暗二つの星が回り合って常に日蝕のような現象を起こしているからですが、まだ望遠鏡のない時代のこと、学究心に燃えたイスラーム天文学者もさすがにこの変光の原因を究明することはできませんでした。

冬の夜空の王者 巨人狩人 (オリオン座)

二月初めの夜8時、ま南の空高く三ツ星とそれを囲む4個の星が輝きます。和楽器の鼓に見えることから日本で「鼓星」と呼ばれるこの星座がオリオン座で、規模はそれほど大きくはないのですが、全天で最も明るい星座といわれるほど、多くの明るい星がまとまっており、冬の夜空の王者の風格をそなえています (図1)。

海の神ポセイドンの子で怪力無双の巨人狩人であったオリオンは、月と狩の女神アルテミスに愛

図1 冬の星座



されたのですが、アルテミスに誤って殺されます。愛するオリオンをわが手で殺めたアルテミスは悲嘆にくれ、大神ゼウスに頼んでオリオンを星にし、いつでも星空で会えるようにしてもらった...とギリシア神話は伝えます。

西暦2世紀にプトレマイオスが設定した星座を踏襲したイスラーム天文学者は、オリオン座に الجبار *al Jabbar* (巨人)と名付けました。巨人の右肩にあたる赤みを帯びた $\alpha$ 星はベテルギウス Betelgeuse と呼ばれ、一見ラテン語風ですが、アラビア語の إبط الجوزة *'Ibt al Jawza* (中心にある者の腋の下)が訛ったものです。ここからもオリオン座が今も昔も冬の夜空の主演であることが分かります。

ベテルギウスの対角にある青みを帯びた $\beta$ 星リゲル Rigel は、ちょうど巨人オリオンの左足にあたるのでアラビア人が رجل الجوزة اليسرى *Rijl al Jawza al Yusrā* (中心にある者の左脚)と呼んだもので、その第1語だけがリゲルとなっている

のです。

三ツ星は巨人のベルトに相応しく、 $\delta$ 星がミンタカ Mintaka (المنطقة *al Minṭaqa* ベルト, 地帯),  $\epsilon$ 星がアルニラム Alnilam (النظم *al Naẓm* 一連の真珠),  $\zeta$ 星がアルニタク Alnitak (النطاق *al Niṭāq* ガードル)と名付けられています。アラビア人は三ツ星の下にぼおっと見える「小三ツ星」を مقبض السيف *Maqbiḍ al Sayf* (剣のつか)と呼び、 $\kappa$ 星を剣に見立ててサイフ Saiph (سيف الجبار *Sayf al Jabbar* 巨人の剣)と呼びました。

### アラビア人がラクダに見立てた双子 (ふたご座)

三月初めの夜8時、頭のま上に2個の明るい星が見えます。これがふたご座の $\alpha$ 星カストルと $\beta$ 星ポルックスで、ギリシア神話では大神ゼウスとスパルタ妃の間に生まれた双子の兄弟です(図1)。兄のカストルが従兄弟に殺されたとき、弟ポルックスはゼウス王に頼んで二人が再び一緒に暮らせるよう空に上げてもらったといわれ、兄弟愛のシンボルとされます。

また、この兄弟が洋上で大しけに遭ったとき、豎琴の名手オルフェウスが船べりに立って琴を奏でて神々に祈ったところ、この双子の兄弟愛を好ましく思っていた海神ポセイドンが兄弟の頭上に二つの星を輝かせて海を鎮めたと伝えられることから、ローマ時代の船乗りたちはカストルとポルックスの像を航海の守り神として船首に飾ったそうです。

ふたご座はこの二つの星とその南西に延びるいくつかの星からなり、仲良く並んだ双子の姿を見ることができます。古代のアラビアではライオンに見立てたといわれますが、星の配列からみてあまりピンときません。ポルックスの左足に当たる $\gamma$ 星はアルヘナ Alhena と呼ばれ、アラビア語の الحناء *al Ḥinnā'* (赤色染料ヘンナ)が転訛したものです。現在では廃れつつありますが、ヘンナは女性が手や足を赤く彩色する染料です。かつては

ラクダの所有を示す朱印としても使われたといわれます。そこで考えられるのは、アラビア人はこの星座をラクダに見立てたのではないかということです。事実、この星座の星の配列から脚の長い西アジアのラクダを連想することが容易にでき、砂漠の民ならラクダを連想するほうがむしろ自然であると思われる。ただ、この $\gamma$ 星は青白い光を放っているのだから、なぜ赤色染料であるヘンナと名付けられたのか疑問が残ります。とはいえ、 $\epsilon$ 星メブスタ Mabsuta は *المبسوطة* *al Mabsūṭa* (伸ばされたもの) に由来し、アラビア人がラクダの伸ばした前脚に擬していたと考えるのが自然であり、また、 $\zeta$ 星メクブダ Mekbuda は *المقبوضة* *al Maqbūḍa* (縮められたもの) に由来し、やはりラクダの折り曲げた前脚と見ていたと考えるのが自然です。

#### 「イエメンの輝くもの」シリウス

(おおいぬ座)

三月初めの夜8時、ま南30度あたりに全天で最も明るい恒星シリウス Sirius が見えます。オリオン座の三ツ星を南東の方向に延ばした位置にひと際明るく輝く星です(図1)。シリウスはおおいぬ座の $\alpha$ 星(主星)で、ギリシア語で“焼き焦がすもの”を意味しますが、アラビア人はシリウスの名前がギリシアから入ってくる以前から、この星を *الشعري اليمينية* *al Shi'rā al Yamaniyya* (イエメンの輝くもの、南の輝くもの)と呼んでいました。このアラビア語の *يمينية* *yamaniyya* はもともと“右の”の意味ですが、メッカ(マッカ)で東を向いて右手(يمن *yaman*)すなわち南の方角にある国が *اليمن* *al Yaman* (イエメン)と呼ばれたので、上記のように“イエメンの輝くもの”とも“南の輝くもの”とも解釈できるわけです。因みに *يمن* *yaman* は“幸運、繁栄”(yumn)の含意をもち、イエメンはローマ時代にはすでに Arabia Felix(幸福のアラビア)と呼ばれていました。

プトレマイオスが設定したおおいぬ座を受け入

れたアラビア人は、この星座の $\delta$ 星<sup>デルタ</sup>にウェズン Wezn (*الوزن* *al Wazn* 重り)と命名しました。この星が重しとなって犬が空からずり落ちそうに見えるからです。

#### 「シリアの輝くもの」プロキオン

(こいぬ座)

オリオン座の $\alpha$ 星ベテルギウスと、おおいぬ座の $\alpha$ 星シリウスとほぼ正三角形「冬の大三角」というをなす明るい星があります。これがこいぬ座の $\alpha$ 星プロキオン Procyon です(図1)。これはギリシア語起源で、pro(前)+cyon(犬)=犬の先達者、すなわち、おおいぬ座の露払いとして東の空に昇ってくることに因んで命名されたものです。

シリウスと同様、プロキオンの名が紹介される前からアラビア人はこの星を *الشعري الشامية* *al Shi'rā al Shāmiyya* (シリアの輝くもの、北の輝くもの)と呼び、すぐ南西に見えるシリウスと対比させていました。右を優位、左を劣位と考えるアラビア人は、東に向かって右手の方角すなわち南を優位とし、北を劣位としたので、シリウスより20度ほど北にあるプロキオンは“不幸”(شؤم *shu'm*)を含意とする *شامية* *shāmiyya* (シリアの、北の)と呼ばれていたのです。

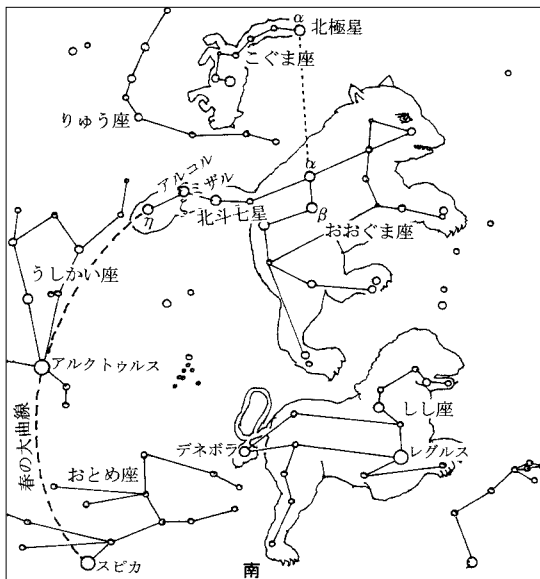
星の明るさは等級で表します。惑星の金星が最も明るくなったときには-4.4等級、去る8月に地球に大接近したときの火星の明るさは-2.9等級でした。恒星で最も明るいシリウスは-1.6等級で、これに対してプロキオンは1.0等級ですから、明るさにおいてもおよそ10対1となり、とてもかなわないわけです。シリウスが“幸せの輝く星”の含意をもつ“イエメンの輝く星”と呼ばれたのに対して、プロキオンは“不幸な輝く星”の含意をもつ“シリアの輝く星”と呼ばれたのも無理からぬことです。

兵士の視力検査に北斗七星（おおぐま座）

四月、五月の夜8時、柄杓形の北斗七星が頭のま上に昇っています（図2）。東に向かって伸びた柄の部分は大熊の尾にあたり、柄杓のボウル（おたまのおつゆが入るところ）は大熊の胴体の後部にあたるので、おおぐま座全体は見る者に覆いかぶさるような巨大な星座です。

熊とは無縁の土地に住むアラビア人はこの星座に熊を連想することはなく、最も目立つ北斗七星を *بنات النعش* *Banāt al Na'sh al Kubrā*（大きい棺台の娘たち）と呼んでいました。柄の先端の  $\eta$  星は *قائد بنات النعش* *Qā'id Banāt al Na'sh*（棺台の娘たちのリーダー）と呼ばれ、 $\zeta$  星は現在のようにミザル Mizar と呼ばれる以前には *أعناق البنات* *'A'nāq al Banāt*（悲しむ娘たちの首）と呼ばれていたといわれます。つまりアラビア人は北

図2 春の星座



斗七星の柄杓部分を棺と見做し、柄の部分をも曳く娘たち”と見做していたのです。おおぐま座という名称をギリシアから踏襲したあとアラビア人が昔から自分たちが使っていた呼び名を変えなかった結果、この  $\eta$  星はその名 *بنات النعش* *قائد*

*Qā'id Banāt al Na'sh* の第2・3語からベネトナシユ Benetnasch という固有名に定着しました。一方、 $\zeta$  星も上記の旧名で呼ばれていたのですが、その後、別名の *الميزر* *al Mi'zar*（ガードル 腰布）の方が普及して現在のミザル Mizar になったといわれます。このミザルは古くから知られた二重星で、視力が素晴らしく良い人なら裸眼でもそばに小さな星がくっついているのが識別できます。昔、アラビアでは兵士の視力検査にミザルを利用したと伝えられます。くっついている小さな星はアルコル Alcor と呼ばれ、原名は寄生虫のようなこの星に相応しく *الخوار* *al Khawwār*（臆病者）です。

因みに北斗七星は誰の目にもつくポピュラーな星のグループだけに、*الركوة الكبرى* *al Rakwa al Kubrā*（柄つきの大型コーヒー沸かしポット）とか、世界の多くの地方で行われたように *المحرث* *al Mihrāth*（鋤）とも呼ばれました。鋤の先端のとがった部分は *مؤشر المحرث* *Mu'ashshir al Mihrāth*（鋤の刃先）、鋤の柄は *مقبض المحرث* *Miqbaḍ al Mihrāth*（鋤の柄）と呼ばれました。

なお、北極星を探す時に、北斗七星のおたまの先端の2個の星すなわち  $\alpha$  星および  $\beta$  星を結ぶ直線を5倍延長することはよく知られています。

「小さなコーヒー沸かし」（こぐま座）

春夏を通じて、北極星を主星（ $\alpha$  星）とするこぐま座が北極星の南側の見やすい位置に来ます（図2）。こぐま座はおおぐま座の北斗七星を小型にしたような形をしているので、古来、中国では「北斗」に対して「小北斗」、欧米では「大柄杓」に対して「小柄杓」、ギリシアでは「大熊」に対して「小熊」、アラビア人も「大きい棺台」に対して「小さな棺台」とか、「大型のコーヒー沸かしポット」に対して「小型のコーヒー沸かしポット」（*الركوة الصغرى* *al Rakwa al Ṣuġhrā*）とか、北斗七星の「鋤」に対して「小型の鋤」（*المحرث الصغير* *al Mihrāth al Ṣaġhīr*）などと呼びました。

アラビア人は北極星を *نجم القطب الشمالي* *Najm*

al Qutb al Shamāliyy (北極の星), النجم القطبي al Najm al Qutbiyy(極の星) النجم الشمالي al Najm al Shamāliyy (北の星) などと呼びますが, この星がほとんど動かないことから المسمر al Mismār (鋌)と呼んだのはなかなかの傑作です。今日キブラといえば, すべてのムスリムが世界のどこにしようと思わずらに向かって礼拝を捧げるマッカ(メッカ)の方角を意味しますが, かつてはマッカの方角を知るために北極星で北の方角を確かめたことから القبلة al Qibla(キブラ)と呼ばれたこともあるといわれます。

### ギリシア人には白鳥も

アラビア人にはめんどり(はくちょう座)

夏から秋にかけて私たちの頭上を東から西へ一羽の巨大な白鳥が悠然と渡って行きます。はくちょう座です(図3)。5個の明るい星が十字形をつくっているのが, 南天の南十字星に対して「北十字星」とも呼ばれます。中でも十字形の頭部すなわち白鳥の尾にある星がひときわ明るいのですぐ見つけることができます。

この明るい星がはくちょう座のα星デネブ Denebで, 図3のようにこと座のα星ベガ Vega

と, わし座のα星アルタイル Altair とで「夏の大三角」をつくります。デネブという呼称は, この星にアラビア人が付けた ذنب الدجاجة Dhanab al Dajāja (雌鶏の尾)という名称の第1語が残ったものです。

もともとこの星座はメソポタミアの古代人がすでに鳥に見立てていたもので, ギリシア人は悲恋に泣いたキュクヌスという若者が白鳥に変えられて空に昇ったとしましたが, アラビア人はメソポタミアの伝説を受け継いで空想上の巨鳥ロック(رخ Rukhkh)に見立て, やがてもっと現実的に雌鶏と見るようになりました。したがってこの星座はギリシア式には Cygnus (若者キュクヌス, 白鳥)と呼ばれますが, アラビア人はめんどり ذنب الدجاجة al Dajāja と呼んでおり, 時に الوزّة al Wazza(がちょう)とか البجعة al Baja'a(ペリカン)などと呼ぶこともあります。

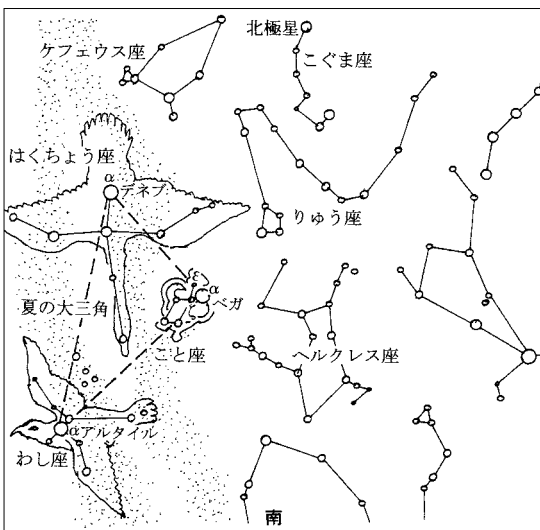
### 織姫は「急降下するワシ」(こと座)

七夕の夜8時にやっと東の空に昇った織姫(ベガ)は, 八月末の夜8時には頭のまっすぐ上に輝きます(図3)。この星はこと座の主星(α星)で, ギリシア人はこの星の小さなグループを楽人オルフェウスが愛用した海亀の甲羅の竪琴になぞらえましたが, メソポタミア式星座の伝統をもつアラビア人は, はくちょう座を「雌鶏」と見なし, 次に述べるわし座を「飛行するワシ」と見, このこと座も النسر الساقط al Nasr al Sāqi(降下するワシ)と見ました。

織女として知られるベガ Vegaも, ラテン語のように見えますが, アラビア人が النسر الواقع al Nasr al Wāqi(降下するワシ)と呼んだもので, その第2語がラテン語風に訛ったものです。

アラビア人はこのα星ベガと, ε星とζ星の3個の星がつくるV字形に, なかば畳んだ翼を鋭角に立てながら獲物に向かって急降下するワシを連想していたのです。それにしても, α星ベガ, ε星, ζ星の3個の星がつくるV字形は, 現在の

図3 夏の星座



汚染された空では双眼鏡で眺めて初めて成る程と思うほど小さなものですが、かつてはワシの畳んだ翼にたとえるほど印象的に見えたのですから、昔の大気がいかに澄んでいたかを想像することができます。いま、過剰に氾濫する人工的な光の害と大気汚染がまさに極限に来ていることを痛感せずにはおられません。

牽牛は「飛行するワシ」(わし座)

こと座の“降下するワシ”に対して、牽牛(彦星, アルタイル)を主星( $\alpha$ 星)とするわし座をアラビア人はالنسر الطائر *al Nasr al Tā'ir*(飛行するワシ)に見立てました。この星座の $\alpha$ 星,  $\beta$ 星,  $\gamma$ 星が作る一直線を、翼をいっぱいガンマに広げ、上昇気流に乗って東へ飛行するワシと見ていたのです(図3)。私たちが彦星とか牽牛星と呼ぶアルタイルは上記のالنسر الطائر *al Nasr al Tā'ir*の第2語に由来します。

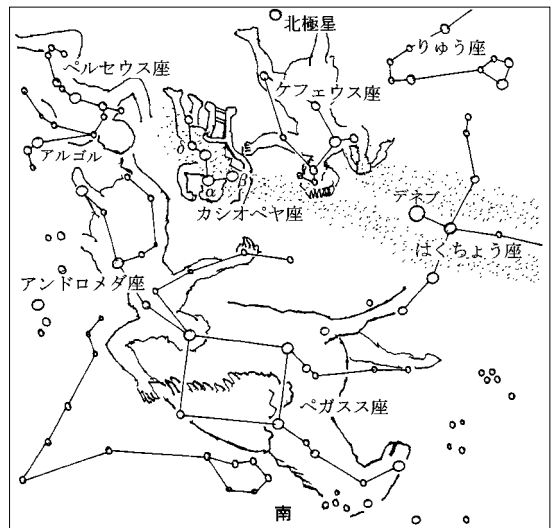
なお、はくちょう座のデネブ、こと座のベガ、わし座のアルタイルが作るほぼ直角三角形が「夏の大三角」です。

王妃カシオペアは「椅子を所有する女性」

(カシオペア座)

カシオペア座は北極星を探す時に使われるW形の星座で、古代エチオピア王ケフェウスの妃カシオペアになぞらえられます。現在、星座図の標準として最も広く使われているフラムスティード星座図を見ると、王妃カシオペアは椅子に腰掛けて両腕を高く上げた姿に描かれています(図4)。これは、カシオペア妃が娘のアンドロメダ姫の美しさを自慢して「海神ポセイドンの孫娘で海のニンフ、ネイレデス五十姉妹も私の娘にはかなうま

図4 秋の星座



い」と高言したのがポセイドンの逆鱗げきりんに触れ、罰として王妃は椅子に腰をかけ両腕を上げたままの姿勢で毎日1回、休むことなく永遠に北極星の周りを回ることになったというギリシア神話に由来します。

アラビア人もこの星座に椅子に座る女性を連想して、ذات الكرسي *Dhāt al Kursiyy*(椅子を所有する女性)と呼んでいました。W字形をつくる5個の星のうち、 $\alpha$ 星は女性の胸にあたるので الصدر *al Ṣadr*(胸)と呼ばれ、それが Schedar/Schedir という固有名になっています。 $\beta$ 星は女性の手的位置にあるので الكف الخضيب *al Kaff al Khaḍīb*(ヘンナで染めた手のひら)と呼ばれ、その第1語だけが Caph/Kaff という固有名になりました。 $\delta$ 星は膝デルタの位置にあるので الركبة *al Rukba*(膝)と呼ばれ、固有名も Rukbat/Ruckbah です。

(おわり)